俳句

大津俳句会

矢継ぎ早寒禽の声空を刺す　井芹眞一郎

初雪や瞳飛び跳ね子ら外へ　秋山恵子

風音を集めて落葉掃きにけり　市原初女

鳴き騒ぐ藪の異変や寒鴉　江藤みち

宮焚火残らず庭を掃き出して　大塚喜久子

散る紅葉今日は転院車椅子　坂本セキ

十二月人を追ひ越し時進む　佐賀久子

歳晩の通院も吾がさだめかな　高崎セイ子

冬の川向う岸なる墓一つ　田中ひさ美

瑠璃色のひかりを溜めて水鳥は　茶円りゅい

冬耕やいのちよろこぶ土の声　原田順子

深みゆく冬動かなくなる樹林　武藤規子

散ることもなく色褪せし寒さうび　森山美穂子

過ぎしこと煙のやうに日向ぼこ　渡邊佳代子

俳句

つのはな句会

鯛焼きの目玉の焦げて昭和死す　星永文夫

筋いっぽん通して祖母の冬銀河　木庭杏子

魚偏の漢字並べて日向ぼこ　上杉　波

赤紙の来そうな水位 冬の月　矢嶋道子

思い出を鞄に詰めて日短か　水野春子

風花は可憐に大地は太平に　梅木トキエ

子らの舞う里の夜神楽風やさし　塚本洋子

狛犬が戯(じゃ)れてきそうな神の留守　志賀孝子

銀杏散り敷く中に不安の種そだつ　田上公代

短歌

大津短歌会

伸びのびてついに倒れし雑草(あらくさ)の綿毛ゆっくり宙に旅立つ　渡辺佐代子

歩をとめるほどに散りにし萩の花小むらさきなる星の細道　吉永恵子

ホーホーと梟なけば暮れせまる森の家にて少女となれり　坂本杲子

久々に寒のゆるむ昼下り庭の柿枝にひよの止れり　岩下文代

病院に生れし曾孫の初声をスマホで聞ける現し世の中　豊岡ミツル

八十路にて杖の効能悟りたる我が蒙昧(もうまい)を知れる秋かは　小平善行

短歌

万年青短歌会

なよなよとゆられてなびくコスモスに吹く風早やも秋風となる　長野和子

暖かい缶コーヒーを膝に抱き嫁の運転われは安らぐ　中山春代

袴着け會孫五才の祝する幾廻りして吾が干支に生れ　合志妙子

月一度友と相寄り短歌(うた)の会老いゆく程に作歌楽しむ　山内信子

枯葉色の雄猫はしっぽをぴんと立て縄張りめぐりと塀かけ登る　磯崎テル子

公園のしじま歩けばもくせいの香ほのかに鳥の声きく　今村光子

いっせいに黄金散らし銀杏樹の冬の真空にひとり清し　河北幸一

ミサイルの世情あやしきときにしてわが骨納むる公園を歩く　吉田良子